日本語・日本語教育部会

【概要】

池　田　來　未*・柄　田　千　尋**

日本語学・日本語教育学部会は、11月19日（土）午前10時5分から13時35分までオンラインにて行われた。本部会では教員3名、学生3名による研究発表が行われた。以下それぞれの発表内容の概要を報告する。

1. 林慧君（台湾大学・日本語文学科教員）
「漱石作品における非外来語のカタカナ表記について」

林先生は漱石作品におけるカタカナ表記されている非外来語を調査し、これらの表記機能や特徴を考察された。

林先生は、採集された用例を語の性質によって10項目に分類し、さらに「慣習的な特殊表記」「音の強調」「特別な表現意図または語の周辺的意味」の3つにまとめられた。

「慣習的な特殊表記」は全部で11例見られ、現代でも通じる表記法だという。「音の強調」は擬音語や笑い声など、音声を重視したものだという。「特別な表現意図または語の周辺的意味」には、和語、感嘆詞等が含まれる。これらはカタカナを用いて「周辺的な意味」や作者の特別な表現意図を表すという。

さらに、林先生は非外来語のカタカナ表記は、少数派であるというカタカナの特徴を生かし、結果的に強調や目立たせという効果につながることを指摘された。（池田）

2. 朱桂栄（北京外国語大学・北京日本学研究センター教員）
「中国の大学の日本語授業の問題点とその解決方案―教師グループの内省シートに基づく分析―」

朱先生は、2018年に開催された日本語教師研修会におけるワークショップの成果物を通して、「知識・能力・素養を共に重視する授業デザイン」の実現性、さらに中国の日本語教師の専門性向上における教師研修の意義について検討された。

朱先生は研修会における代表例の中から、日本語教育における主幹科目である「基礎日本語」を選んで事例研究をされた。

朱先生によると、教師が授業デザインを考案する際に「知識・能力・素養を共に重視する」意識が現れているという。また、研修会を通して他の教師や専門家とやりとりし、新しい授業デザインについて検討することは、教師の意識の転換及び能力の向上のために有意義であると指摘された。（池田）

3. 趙萱（北京外国語大学・北京日本学研究センター学生）
「多義的視覚形容詞の意味拡張に関する一考察――「暗い」と“暗”の中日対照研究を中心に」

趙さんは、日本語「暗い」と中国語“暗”の意味構造と意味拡張を対照し、その非対称性について分析された。

趙さんは「暗い」及び“暗”ではいずれも具体的な意味領域から抽象的な意味領域への拡張が見られると指摘された。また、両者のプロトタイプ

＊お茶の水女子大学大学・院生
＊＊お茶の水女子大学大学・院生

的意味に共通点があることにも言及された。

しかし、「暗い」の意味拡張の動機づけにシネクドキーがあるのに対し、“暗”にはメタファーとメトニミーしかないことを指摘された。さらに、共感覚的比喩表現における拡張の仕方、物事の状態ドメインへ拡張できるか否かといった違いがあることも指摘された。

こういった差異があることから、趙さんは「暗い」と“暗”には非対称性があると結論づけられた。（池田）

4. 連菁（北京外国語大学・北京日本学研究センター学生）
「句・文を前接成分とする『X系/派/流』についての考察」

連さんは、句や文を前接成分に持つ「X系/派/流」の諸特徴を挙げ、このような形式が成立する仕組みについて考察された。

連さんは、句や文を前接成分とする「X系/派/流」には「命名用法」「婉曲用法」の2つの表現効果があると指摘された。「命名用法」はあるモノを何らかのカテゴリーに位置付け、そのモノの特徴を提示する効果、「婉曲用法」は、個別のモノを指示して背景に同類の集団があることを暗示する効果であるという。

このような用法はインターネットで多用され、この背景にはブログ等の言語活動場面の特徴と若者に代表される使用者の心理が影響しているという。また、句や文を前接成分に持つ「X系/派/流」は臨時的に生じ、その一つのテキストでしか一語性を保たない非標準的な合成語であるということも指摘された。（柄田）

5. 戈春暁（北京外国語大学・北京日本学研究センター学生）
「外来語程度名詞と増加・減少を表す動詞類との共起関係」

戈さんは、文法的な視点から外来語程度名詞と増加・減少を表す動詞との共起関係を考察された。

戈さんは、外来語程度名詞は増加を表す動詞類と共起する傾向が強いと指摘された。そして一方で、増加・減少を表すいずれの動詞とも共起する語が多いという。また、増加を表す動詞「増える」「高める」「上がる」と共起する外来語程度名詞を具体的に考察するとともに、複数の動詞と共起する外来語程度名詞はより抽象度の高い「程度」を表すことを指摘された。

さらに戈さんは、外来語程度名詞「ウエート」と共起する動詞群について、「ウエート」が物理的な重さなどの具体的量を表す用法を比喩的に拡張した形であり、程度の「重要度」・量の「重要さ」・力点の「重点」を表していることを明確に示すものであると指摘された。（柄田）

6. 西坂祥平（お茶の水女子大学教員）
「体験型・発信型プロジェクトを通した日本語学習者の防災意識の変容」

西坂先生は、日本語学習者による体験や発信を中心としたプロジェクトの実践結果をもとに、用いられる言葉の質的な違いから日本語学習者の防災意識の変容を考察された。

西坂先生は留学生向け科目で自然災害について「知る」活動、防災に関することを「体験する」活動、そして留学生用の防災ガイドブックを作成する「発信する」活動を行い、受講生の2名にインタビュー調査を行った。

インタビュー調査の結果、授業を通して既存の知識を自分の経験や解釈に基づく言葉にするようになっていく変化が見られたという。また、ガイドブックの作成では、情報に主体的な意味づけを行う様相が見られたという。体験・発信型のプロジェクトが、発信者である自身を他者に貢献できる有能な存在に位置付けることに繋がるということも指摘された。（柄田）